

トルコの言語改革における造語の手法

指導教員：菅原 睦助教授

2006年度卒業論文
東京外国語大学 外国語学部
南・西アジア課程
トルコ語専攻
8503048 井上沙弥香
(40文字×40行)

はじめに	3
第1章 20世紀初期の言語簡素化運動	5
1-1. オスマン語と人々の言葉	5
1-2. 言語簡素化運動	6
1-2-1. トルコ人協会	6
1-2-2. 雑誌『若いペン』とズィヤ・ギョカルプ	7
第二章 1930年代のトルコ言語協会の取り組み	11
2-1. トルコ言語協会の設立	11
2-1-1. 設立までの動き	11
2-1-2. はじめに掲げられた仕事	12
2-2. 単語への取り組み	14
2-2-1. 国家総動員の単語収集とアンケート	14
2-2-2. 造語の実例	16
2-2-3. 造語における手法と結果	22
2-3. 問題と軌道修正	23
2-3-1. 混乱と行き詰まり	23
2-3-2. 太陽言語論	24
第三章 その後の意見、影響	29
3-1. 言語改革に向けられた批判	29
3-1-1. 世代差 - 新たな2重言語 -	29
3-1-2. イスタンブル教師組合	30
3-2. 言語への影響	31
終わりに	33
参考文献一覧	34

はじめに

トルコの言語改革¹とは、1923年にトルコ共和国が建国されたのち、初代大統領ムスタファ・ケマル（アタテュルク）が西洋化に向けて行った諸改革のひとつである。改革において中心的な役割を果たした組織は、1932年にアタテュルクの命を受け設立されたトルコ言語研究委員会（Türk Dili Tetkik Cemiyeti）であった。この組織は、1936年トルコ言語協会（Türk Dil Kurumu）に改名され今日に至っている。²

改革の中身は、イスラーム教を受け入れて以来、何世紀にもわたりトルコ語に流入してきたアラビア語やペルシア語の語いや文法要素を排除し、代わりにトルコ語起源の語いに置きかえることで純粋なトルコ語をつくろうとする純化運動であった

以下にトルコの言語改革に関する記述を紹介する。

「トルコの言語改革は非常に高い成果をあげた文化的な改革である。今日では、ほんの一握りの学者集団のみが1928年以前のアラビア文字で書かれた出版物を読むことができ、十分な教育を受けた若者ですら、50年ほど前の新聞は読みづらいと感じる」³

「トルコ共和国の西洋化に向けてアタテュルクが行った改革の中で、文字と言語改革はおそらく - 改革がはじめられて70年近くたった今日の状況を考慮すると - 最も成功をおさめたと言える。宗教や民法といった分野では、改革は特に田舎で頻りに拒否された。しかし、言語の分野では、今日最も保守的な人々ですら、否応無しに改革に強く影響を受けた単語を使っている。保守的な集団が出版物や公の演説で意識的に昔風の言葉を使ったとしても、その言葉は改革以前のものとは大きく異なっている」⁴

「言語改革により、言語面においてもナショナリズムが行き渡った」⁵

以上のことから、言語改革が人々に影響を与え、言葉に大きな変化をもたらしたことがわかる。

トルコ言語協会は現在も活動を続けているため、ある意味改革が終わったと断言することはできないが、改革の絶頂期は、その擁護者であるアタテュルクが存命した1938年

¹ トルコ語の Dil Devrimi/İnkılabı を指す。英語では Language Reform と訳されており、本稿ではこれにならう。

² 以下、混乱を避けるため、本稿では1936年以前の組織について述べる時もトルコ言語協会という名称を用いる。

³ Boeschoten,1991,p.165

⁴ Brendemoen,1998,p.242

⁵ Banguoğlu,1987,p.371

までと推測される。協会の設立から彼の死までの6年間、トルコ言語協会は公的支援を受けながら任務を遂行した。しかし彼の死後、協会職員が素人言語学者であったがゆえに協会の仕事内容が非学術的だと批判を受けたり、政党との癒着が指摘される中で徐々にその存在は縮小していった。

言語改革においては、トルコ語にかんする執筆、調査、アラビア語やペルシア語起源の単語をトルコ語に置き換える作業が行われた。本稿では、言語改革の絶頂期であった1932年から1938年までの6年間に、単語の純化がどういった原則のもと、どのような手法で行われたかを中心に扱う。また、これに関連して、共和国設立前の20世紀初期における言語簡素化運動の様子と、1940年代における純化運動の影響、批判を論じる。

言語改革の全体的な流れにかんしては、主にトルコ歴史協会の『言語改革の30年』(*Dil Devriminin 30 Yılı*)、ルイスの『トルコの言語改革：悲劇的な成功』(*The Turkish Language Reform: A Catastrophic Success*)、レベンドの『トルコ語における発展と簡素化の段階』(*Türk Dilinde Gelişme ve Sadeleşme Evreleri*)を参考にした。当時の新聞記事や資料は、同じくレベンドの著書とコルクマズが編集した史料集である『アタテュルクとトルコ語：文書集』(*Atatürk ve Türk Dili: Belegeler*)を利用した。

第1章 20世紀初期の言語簡素化運動

言葉への問題意識は、オスマン帝国時代から存在してきた。本章では、官僚たちが使用していた、いわゆる文語であるオスマン語の特徴と、ナショナリストたちが行った言語簡素化運動を見ていく。当時はまだ、純化が主流の考え方ではなかった。

1-1. オスマン語と人々の言葉

トルコ共和国建国前のオスマン帝国時代、学者や知識人、上流階級の人々が使った言葉はオスマン語と呼ばれ、一般の人々の言葉とは大きくかけ離れていた。だが、オスマン語にしても、人々の言葉にしても、アラビア語やペルシア語単語の影響を受けていたことに変わりない。ここでは、オスマン語の特徴について述べたあと、オスマン語と当時の人々の言葉との違いを明らかにする。

オスマン語は一言で表すと、トルコ語、アラビア語、ペルシア語の単語や文法要素の入り混じった混成言語であった。そのため、アラビア語やペルシア語の教養がある者にしか扱うことができなかった。カルパットによれば、アラビア語やペルシア語の影響を受け、長々と不要な形容詞をつけた冗長な言葉使いや過度の粉飾は、学識や教養を示すものであり、どんな単純なことを表すにも、アラビア語やペルシア語の要素を盛り込むことが美德とされた。⁶

語いの面においては、ひとつの概念に対してトルコ語、アラビア語、ペルシア語と少なくとも3つずつ同義語が存在していた。この点でも、オスマン語はよりいっそう難解な言葉であったと言える。それだけでなく、オスマン語は単語の域を越えて、アラビア語の語構成や、ペルシア語のイザーフェと呼ばれる修飾法といった文法要素まで借用をしていた。

以下は借用された文法要素の一部である。

- ・アラビア語の単語は通常、3つの子音からなる語根がもとにつくられる。この3つの子音の間に短/長母音のパターンを組み込んだり、2番目の子音を2重にすることで多くの単語が派生する。例えば、アラビア語起源の語根 **K-T-B** 「書くこと」の派生形である **kâtip** 「書く人」、**mektup** 「書かれた」をオスマン語は借用していた。⁷こうすることで、借用の量は2倍にも3倍にも膨れ上がった。
- ・トルコ語の修飾は、形容詞が名詞に先行するが、アラビア語やペルシア語はその順序が逆である。イザーフェと呼ばれるペルシア語で名詞と修飾語の間に挿入される **i** をオスマン語が借用することで、逆さの語順が当たり前のように使われていた。

⁶ Karpat, 1984, p. 189

⁷ Lewis, 1999, p. 6

- ・その他にも、オスマン語にはアラビア語で屈折した複数形や、名詞の性を受けて語尾変化した単語も入り込んでいた。

一方で、人々の使う言葉にもアラビア語やペルシア語の単語が多く入りこんでいたが、トルコ・ナショナリストのズィヤ・ギョカルプによれば、オスマン語に入った借用語と、人々の言葉に入った借用語は2つの点で異なっている。まず1点目に、人々の言葉には同義語が存在しない。理由は、本来無かった宗教に関する *cami*「モスク」、*ezan*「アザーン」、*namaz*「礼拝」といった単語を借用していること、借用をした時、既にトルコ語にその同義語がある場合はそのトルコ語を捨て去っていること、たとえ同義のトルコ語が残ったとしても、借用した単語かトルコ語の単語のどちらかの意味を変えて使っているためであった。だが、オスマン語では、「パン」に対してトルコ語の *ekmek*、ペルシア語の *nan*、アラビア語の *hubz* といった具合に、意味の違いがないにもかかわらず、ひとつの単語に最低3つずつ単語が存在していた。2点目に、意味や言い方の点で、人々は借用語を自分たちの言葉に合わせている。例えば、ペルシア語の *haste* は「傷つけられた」という意味だが、人々の間では、「病気の」という意味で使われており、言い方も *hasta* となった。オスマン語を使う者の目には、これは単語の正統性を揺るがす破壊行為と映った。⁸

以上のことから、人々は自らの言葉になじむよう、柔軟に借用語を取りこみ、同義語の存在による意味の衝突を避けてきたことがわかる。もちろん人々はこれを無意識に行っていたが、言語の淘汰という意味で、これは自然なプロセスなのだろう。これに比べるとオスマン語は、非常に人工的な言葉で、人々の言葉との格差は明らかであったと言える。

1-2. 言語簡素化運動

第二次立憲制時代(1908-1918)、オスマン帝国の再建を目指すナショナリストたちの手により文語を口語に近づけようとする言語簡素化運動が展開され始めていた。⁹彼らは雑誌刊行をすることで思想を広めようと試みた。主な集団として、イスタンブールのトルコ人協会(Türk Derneği)、テッサロニキの雑誌『若いペン』(*Genç Kalemler*)が挙げられる。これらの集団内には、言葉に関する様々な立場が存在した。ここでは、これらの集団が、言語簡素化に向けて掲げた原則と簡素化運動が不完全燃焼のまま終わりを迎えて行った様子を見ていく。

1-2-1. トルコ人協会

トルコ人協会は、ネジップ・アースムをはじめとして、アフメット・ミドハト、ルザー・テヴフィク、ヴェレット・チェレビーらにより1908年にイスタンブールで創設されたのち、協会と同名の雑誌を刊行し始めた。翌年、雑誌『トルコ人協会』に宣言を出し、協会

⁸ Gökalp,1999,pp.115-117 による。

⁹ 新井,2002年,141-142頁

の政策を打ち出した。14項目からなるこの政策のうち、言葉にかんしては、オスマン帝国のトルコ語を全オスマン人の話す言葉にするためにも、トルコ語習得における困難を取り除くこと、またトルコ語の特徴を明らかにするために今日までの変化を調査することが謳われている。9項目では、協会の用いる言語に関する原則が掲げられている。

(9項目)「オスマン語がアラビア語やペルシア語から受けてきた恩恵は否定することができない。また、オスマン語をこれらの誉れ高い言語から分離させることは、オスマン人が夢にも思わなかったことである。このため、トルコ人協会はオスマン人にとってなじみのある、良く知られたアラビア語やペルシア語の単語を選んで使う。よって、本協会が出版物等で使う言葉は最も簡素なオスマン・トルコ語である」¹⁰

しかし、協会のメンバーたちは、言葉にかんし共通の見解を持っていなかった。スレイマン・ナジーフは、言葉に手出しをすべきでないという保守主義者であり、フエアト・キョシュエリフェは、トルコ語から完全に外国の要素を排除することを望む純化主義者であった。この他にも、現在使われているアラビア語やペルシア語の単語はトルコ語とみなして、新しい単語はトルコ語の接尾辞からつくるべきだと主張するトルコ主義者もいた。

メンバーで詩人のジェラルム・サーヒル¹¹は、1910年6月9日付けの雑誌『科学の富』(*Servet-i Fünun*)で次のように述べている。

「言葉を一新したいと願う者が最初にすべきことは、外国の文法を排することだ。確かにわれわれは単語が必要だが、あくまで単数形の単語だけが必要なのである。別の意味を持ち、単数形と全く異なる複数形や女性形、イザーフェは不要である…また、7世紀にもわたる過去を捨て去るという言語簡素化のやり方を、私は受け入れることができない」¹²

彼らは雑誌『トルコ人協会』において、トルコ学に関する様々な調査、執筆を行い一定の功績を残したが、言葉に関しては思想の不一致のため、具体的な結果を残さないままに1913年、消滅した。

1-2-2. 雑誌『若いペン』とズィヤ・ギョカルプ

1911年には、テッサロニキでトルコ主義者の若者たちを中心に雑誌『若いペン』が刊行され始めた。会員の中には、有能な書き手、詩人、思想家がおり、彼らは「話すように書こう」という合言葉のもと、国を代表する文学をつくりあげるために新言語運動を展開した。

彼らの掲げた原則は、主に3つあった。めったに使われない、無駄な借用語を排するこ

¹⁰ Arai,1994,pp.43-44

¹¹ 彼はのちに、トルコ言語協会の会員にもなっている。 *Dil Devriminin 30yılı*,1962,pp.86-87

¹² Levend,1972,p.309

と。現在人々の間に普及している借用語はこのまま維持すること。語構成、語尾変化における外国の文法を排すること。これらのことからわかるように、彼らはトルコ人協会とは違って、より現実的で人々に目を向けていた。そのため、雑誌刊行とともにテッサロニキでは、新言語運動が新聞に取り上げられ、一時的な盛り上がりを見せたが、バルカン戦争の到来によりその幕を閉じた。

雑誌『若いペン』刊行の中心を担っていたのは小説家のオメル・セイフェッティンであった。¹³彼は、雑誌の2号目で「新言語」(Yeni Lisan)という見出しの記事を出し、ずっと使ってきたアラビア語やペルシア語の単語は放棄できなくても、文語と口語を統一して国民的な文学をつくるべきだと主張し、新言語運動の先駆けとなった。その後の号では、新言語がどうあるべきか議論が続いた。主な内容は以下の6つであった。

- ・無知な者が言葉の変化を早める権利があるか。
- ・単語の借用はあっても、文法の借用はあって良いものか。
- ・3つの言語からなる言葉がありえるのだろうか。この病から言葉を救うのが、われわれの義務なのではないか。
- ・トルコ語簡素化のため、アラビア語やペルシア語単語の代わりに、純化主義者の主張するチャガタイ語やトルクメン語の単語を置きかえれば成功するのだろうか。
- ・簡素化において、アラビア語やペルシア語の名詞限定、前置詞の使用を避けるのは正しいのか。
- ・トルコ語になじみ、トルコ語化したアラビア語やペルシア語単語を排する必要はないのではないか。¹⁴

だが、彼らの言語に対する真摯で慎重な姿勢はかえって、目標とすることの境界線を不明瞭にしてしまったと考えられる。またバングオールによれば、この時代には確固たる敵として官僚や政府組織の存在があり、彼らはオスマン語に頑なに固執していた。¹⁵そのため、彼らの目指す簡素化された新言語は、雑誌とその周辺以上に広がることがなかったのである。

雑誌『若いペン』には、ズィヤ・ギョカルプも参加していた。彼は当初、新言語においてアラビア語やペルシア語文法を排し、相当するトルコ語があるアラビア語やペルシア語は使用すべきでないという考えをもっていた。新言語運動が終焉を迎えたあとも、彼はトルコ主義者として言語にかんする思想をかなり具体的なレベルまで発展させ、晩年に著書を発表している。彼はそこで、言語におけるトルコ主義がどうあるべきか11項目にわたって示している。以下にその11項目を引用する。

1 われわれの国民語 (Milli Dilimiz) 実現のため、オスマン語をなかったものとして捨

¹³ 新井, 2002年, 142頁

¹⁴ Levend, 1972, p.318

¹⁵ Banguoğlu, 1987, pp.286-289

て去り、民衆文学に基礎を見出すトルコ語を素直に受け入れ、イスタンブールの人々、特にイスタンブールの女性のように書くこと。

- 2 人々の言葉にかんし、トルコ語に同義語がある場合は、アラビア語やペルシア語起源の単語を排除すること。しかし完全な同義語ではなく、微妙なニュアンスの違いがあるものは残すこと。
- 3 人々の言葉になじみ、言い方や意味の点でトルコ語化しているアラビア語やペルシア語単語はトルコ語とみなし、綴りもトルコ語化した言い方に合わせること。
- 4 借用語にその座を奪われ、廃れた古いトルコ語単語を蘇らせないこと。
- 5 新たな用語が必要な時、まず人々の言葉にある単語の中から探すこと。無い時は、トルコ語の文法要素を使って新たにつくりだすこと。これも無理であれば、アラビア語やペルシア語から成句ではなく、単語レベルの借用をすること。時代や職業に関する特別な用語は外国語をそのまま使用すること。
- 6 トルコ語におけるアラビア語やペルシア語の特権を廃止し、この2つの言語の語形変化、前置詞、成句を借用しないこと。
- 7 トルコの民衆が知っていて使用している単語はどれもトルコ語である。人々に親しまれ、非人工的な単語は全てトルコ語に属するものだ。国民語 (Bir milletin dili) とは、息絶えた語源からでなく、現に使用されている語源からなる生命を宿した有機体である。
- 8 イスタンブールのトルコ語の母音調和、単語の形式や用語を新たなトルコ語の基礎に据える他は、他方言からの単語、語形変化、成句を借用しないこと。ただ、トルコ語の構造や特別な言い回しに関する比較の意味で、これらの方言を詳しく研究すること。
- 9 トルコの文明史に関する作品を執筆する時、古いトルコ社会の用語を使う必要が出てくる。だが、これはあくまで用語で、それを実際に使ったり、廃れたものを蘇らせないこと。
- 10 単語はそれが表す意味 (tarife) の定義でなく、標識 (işaret) である。単語の意味を語源から推測することはできない。
- 11 これらの条件のもと、新たなトルコ語の辞書や言語学の本を出版すること。¹⁶

項目1に見られるように、イスタンブールのトルコ語がお手本として好ましいとされたのは、当時それが言いまわし、統語論、音韻論の点から最も発達していると考えられていたためである。項目2の、単語が持つ微妙なニュアンスについて例を挙げると、トルコ語起源の *ak* とアラビア語起源の *beyaz* は両方とも辞書では「白い」と定義されており、一見同義語のように見える。しかし前者は *ak deniz* 「地中海」、*ak saçlı* 「白髪の」、*ak düş-* 「白髪が生えはじめる」といった決まった言い回しにのみ使われている。一方の后者は「白、白い」の意味で、*beyaz peynir* 「白チーズ」、*beyaz şarap* 「白ワイン」、といった具合に、より

¹⁶ Gökalp, 1999, pp.138-140

広範に用いられている。¹⁷項目4、7、8、9からは、生命を宿している言語に対し、既に使われていない単語や他の言葉の一部分を人為的にとってつけることを、彼がどれだけ不自然なことと考えていたかが読み取れる。項目10では、長い歴史において言語間にとのような接触、借用があったかは定かでないため、純化主義者のように語源にこだわる必要性がないことを示している。

¹⁷ Tekin, 1997, pp. 115-119 による。テキンは、この他にもトルコ語の *yürek* とアラビア語の *kalp* は同じ「心」でも、前者は「勇気」、後者は「心臓」という意味の違いがあると指摘している。トルコ語の *gebe* とアラビア語の *hamile* は、両方とも「妊娠している」だが、前者は直接的、後者は婉曲的な言い方だという。

第二章 1930年代のトルコ言語協会の取り組み

トルコ言語協会の設立に伴いはじまった言語改革は、人々やメディアをも巻きこんで進んでいった。本章では、1932年の設立からアタテュルクの死までの6年間、言語改革がどのように行われ、またどういった背景からあらゆる言語の源をトルコ語とする太陽言語論が出現したのかを論じる。

2-1. トルコ言語協会の設立

1923年、新たに共和国が誕生した。すると、今まで散在して行われてきた言語への取り組みが一気に国家レベルで行われるようになった。トルコ・ナショナリズムを覚醒させるため、言語にかんしては帝国の衰退や後進性のイメージと結びつく外国要素の撤廃が求められるようになった。ここでは、共和国誕生からアラビア語やペルシア語の語いをトルコ語で置き換える純化運動を進めるべくトルコ言語協会が1932年に設立されるまでの流れを見ていく。

2-1-1. 設立までの動き

共和国が誕生する前の1920年、国民教育省の大臣であるルザー・ヌルの命令でアナトリア諸方言における純正トルコ語単語が収集された。作業は小規模なもので数年のうちに終わった。1925年に、集まった単語の分類作業はアフメット・サフエト、ヴェレット・チェレビー、ハサン・フェフミ等の学者たちが行った。1926年には、新たに設立された言語委員会(Dil Encümeni)が仕事を引き継ぎ、1929年から1930年にかけて再度、収集作業を行った。ハミト・ズベイルとイスハク・レフエトが分類をして、1932年に辞書『母語からの収集』(*Anadilden Derlemeler*)が出版されるに至った。

また、1923年には、国会議員のトゥナル・ヒルミが国会に草案を提出した。彼は草案で、国民教育省にトルコ語委員会を設置すること、政府内で使用される専門用語を一般的な単語に置き換えること、法律や新聞、教科書もこの単語に倣って書くことを提案したが、可決されることはなかった。この当時、言語への関心は専ら正書法、文字問題であり、単語問題は簡素化運動の時のように議論されたり、話題にならなかったのである。

1928年にトルコ語表記のためラテン文字を採用することが決まると、単語に再び関心が集まるようになった。1929年にイスメット首相は官邸に軍司令官、言語委員会、大学教授、芸術学校の代表者たちを招待し、トルコ語辞書を制作する旨を伝えた。そして、2月17日の首相演説で、「われわれの言葉は今まで外部から侵入を受け放題であった…われわれの言葉の輪郭を描こうではないか、言葉を救おう」¹⁸と国民に呼びかけた。演説

¹⁸ Korkmaz,1992,pp.251-252

の中で彼は、意識的にトルコ語起源の単語を使ってアラビア語やペルシア語単語の使用をできる限り避けた。これは、当時の政府高官としては珍しい試みであったと言える。その中には、yüzlük「世紀」(asır の代わりに)、gerek「必需品」(icabat の代わりに)、değimli「重要な」(ehemmiyetli の代わりに)、sözlük「辞書」(lugat の代わりに) などがあり、一部の単語は今日まで使われつづけている。

演説の翌日の新聞では、以下のように伝えられている。

「昨日、トルコ語辞書制作のためアンカラで大きな会議が開かれた…会議参加者は、辞書をできるだけ短期間のうちに完成させるという意見で一致した。今後、月に1回集まって、仕事の成果を発表して作業を進めていくことが決定された。目的はトルコ語を簡素にすることであった」¹⁹

共和国誕生で政府がオスマン語に固執する必要性がなくなり、文字の点でもアラビア文字の使用が廃止された。²⁰こうして、単語問題が国家レベルで扱われる時が来たのである。

2-1-2. はじめに掲げられた仕事

1932年7月11日、第1回トルコ歴史学会議を終えた晩、アタテュルクはいつものように友人を家に招き、国事にかんしあれこれと議論をしていた。その席で彼は、「言語問題に取り組む時が来た」と切り出した。それまで言語分野の仕事を請け負ってきた言語委員会が1931年に解散したため、より組織的に作業を進める必要性が出てきたのである。こうして、トルコ歴史調査委員会の兄弟組織として、のちのトルコ言語協会となるトルコ言語調査委員会の設立が決定された。その日のうちに作業計画、各部門等が検討され、翌12日には、委員会設立の嘆願書が内務省に受理された。

委員会の創設者はサミフ・リファトをはじめとして、ルシェン・エシュレフ、ジェラル・サーヒルとヤクップ・カドリであった。後に加わり作業を行ったメンバーにかんしても言えることだが、彼らの多くは大統領側近の自称「言語学者」であり、国を代表するような言語家ではなかった。これが、のちに組織が学問的な価値に欠けるという批判につながった。しかし、誕生して間もない共和国を支える人材には限りがあったため、本来は学問的分野においてのみ活躍すべき人物が、政治においても何らかの役割を担わされていた、またはその逆の状況が存在していたと言えるだろう。

アタテュルクは、具体的な作業に取りかかる前に、様々な人の意見を聞くべくオープン

¹⁹ Levend,1972,pp.406-407

²⁰ オズデミルは、トルコ語の音韻体系や語構成に合った文字に変わったことで、アラビア語やペルシア語の単語や成句が存続しにくい環境になったと指摘している。Özdemir, 1978,pp.543-545 による。

形式の第1回トルコ言語会議の開催を決定した。彼は、トルコ語の過去、現在、未来、語い、言語に対する考え、協会の部門や仕事について皆で検討し、取り組むことを望んでいた。会議開催前、企画委員会が立ち上げられた。企画委員会は、9月10日付けでアナトリア通信に、会議の開催が9月26日からであること伝え、会議で発表される知識人たちの論文に9月19日から9月25日のあいだ目を通した。

こうして、1932年9月26日から10月5日まで、ドルマバフチェ宮殿で第1回トルコ言語会議が開催された。事前にマスコミを通じて一般参加を呼びかけていたため、会議には各省庁の大臣、国会議員、当時アタテュルクを訪ねてトルコに来ていたマッカーサーだけでなく、大学教授、教職員、作家、言語愛好家、民衆代表らが集まった。会期中、20本の論文が発表された他、13の演説が行われた。トルコ語の古さ、インド-ヨーロッパ語族や他言語とトルコ語の関係性が指摘される中、協会設立に否定的な立場をとる者もいた。ヒュセイン・ジャーヒトはそのひとりで、会議で次のように述べている。

「過去25年間で徐々に強まってきた簡素化の動きは、今日アラビア語やペルシア語から入った言い回しをトルコ語から排除してしまった。近い将来、外国語要素が完全になくなることに疑いの余地はない。そのため、なるべくして自然になっていくのだから無理に何かをする必要はない。あえて巨大な組織をつくって努力したところで、うまくは行かないだろう…文字改革だけで十分であろう…アラビア語やペルシア語の単語を排除して、チュルク諸語や古いトルコ語に頼ったところで何になるというのだ…口語と文語の一致はありえない。あるがままにしておけばいいのだ」²¹

彼の発言からは、会議が様々な意見交換の場であったこと、また言葉に対して依然、保守的な考えが存在していたことが読み取れる。確かにそれまで人工的な介入を受けることなく、自然に簡素化してきた言語の変化スピードは、国の組織が介入することで損なわれてしまった。しかし、その一方で、生活に根付き、文化的背景を背負った言語に変化をもたらすためには、それだけ強大な組織の力が必要であったと思われる。

国民の力でトルコ語を発展させる道を模索すべく開催された会議の最終日、協会の設立目的が発表された。ひとつ目はトルコ語の美しさ、豊かさを明らかにすること、2つ目はトルコ語を世界の言葉に値するレベルに高めることであった。また、協会の後援会長としてアタテュルクが、名誉会長として歴代の国民教育大臣が就任することが決定した。

この他、会議の結果、協会が取り組むはじめの7つの作業計画が発表された。

- 1 シュメール語、ヒッタイト語と最古のトルコ語、インド-ヨーロッパ語族やセム系諸語とトルコ語を比較すること。
- 2 トルコ語の歴史的発展を調査すること、比較文法を執筆すること。

²¹ Levend,1972,pp.409-411

- 3 アナトリア諸方言の単語を収集、トルコ語の接尾辞を調査することでオスマン語の単語にトルコ語の相当語を見つけること。
- 4 トルコ語の歴史、文法を執筆すること。
- 5 トルコ語に関する国外の作品を収集し、必要ならばトルコ語に翻訳すること。
- 6 機関紙として雑誌刊行をすること。
- 7 協会の作業にかんし、各新聞で発表をすること。²²

さらに会議で選出された中央委員会がこれとは別に3つの優先タスクを発表した。

- ・人々の言葉、古い文献にあるトルコ語単語を集めてまとめること。
- ・トルコ語の語構成を明らかにし、それを利用してトルコ語起源の単語から派生させて造語を行うこと。
- ・トルコ語に広く普及していたり、特に書き言葉で使われている外来語の代わりになるトルコ語起源の純粋な単語を広めること。²³

ここで注目したいのは、協会が純化主義の立場をとっていて、言語簡素化運動の時代を経てきたアタテュルクもまたこれを認めたことだ。今まで比較的穏健だった簡素化とは異なり、徹底した純化運動が協会の手によりはじめられようとしていた。協会設立前の時代にも純化主義者は存在してきたが、ほとんど支持を受けておらず、いつも主流の考えの外にあった。それが、アタテュルクからの支持を得ることで、一気に国をあげて取り組む仕事の中心的な考えになったのである。

会議が終わると、協会の中心である首都のアンカラで作業が開始された。文法 - 統語論、辞書 - 専門用語、言語学 - 文献学、語源学、収集、出版の各部門で内規が定められ、補佐メンバーが送りこまれた。

2-2. 単語への取り組み

トルコ言語協会は、アラビア語やペルシア語の語いをトルコ語で置き換えるために、純正トルコ語の調査と、トルコ語の接尾辞を利用した造語を行った。ここでは、純正トルコ語がどのように調査されたかを見たあと、実際の造語の例をあげて、その手法を論じる。さらに、造語がトルコ語の語いに与えた影響を考察する。

2-2-1. 国家総動員の単語収集とアンケート

第1回トルコ言語会議が終わると、オスマン語の語いをトルコ語で置き換えるための作業が本格的に始まった。作業は組織的に進められ、人々やマスメディアを巻きこみ国家総

²²Korkmaz,1992,p.207

²³ Lewis,1999,p.49

動員で単語問題が取り組まれた。

主な手法は全国規模の単語収集、新聞やラジオを通じたアンケートで、それぞれ作業の成果として一定期間ののち、『人々の言葉からの単語収集：収集誌』（*Halk Ağzından Söz Derleme:Derleme Dergisi*）、『オスマン語 - トルコ語 ポケットガイド』（*Osmanlıcadan Türkçeye Cep Kılavuzu*）が出版された。また、これらと平行して、協会は古い文献を調査し、『オスマン語 - トルコ語 相当語調査誌』（*Osmanlıcadan Türkçeye Söz Karşılıkları Tarama Dergisi*）を発表した。これらの結果は全て、のちに協会が造語を行う際の重要なデータベースとなった。ここでは、単語収集やアンケートがどのように行われたかを見ていく。

単語収集の目的は、人々の間で使われている純粋なトルコ語起源の単語を見つけることであった。1933年、協会と国民教育省が協力し、各州に単語の記入用紙と収集のやり方を記した手引書が配布された。その中では、協会を頂点とした組織の構造が説明されている。まず、各州で知事を会長とし、地元の協会メンバー、軍関係者、教育委員会会長、高校教師、中学校、芸術学校、職業専門学校の教師、医師からなる「収集委員会」（*Derleme Heyeti*）がつけられた。その下に、各村で村長が局長の「収集支局」（*Derleme Şubesi*）、またその下に、教師がリーダーを務める「収集の炉辺」（*Derleme Ocağı*）があった。州の収集委員会は、下位組織から集まった用紙を分類し、作業の進み具合を協会に報告する義務があった。

実際、用紙に記入をしたのは、役人だけでなく自営業者、言語に興味を抱く者、望む者は全員であった。用紙は10×14cmで、10の記入項目があった。

- 1 単語
- 2 単語が使われている地域
- 3 単語の種類
- 4 意味
- 5 同義語、反意語
- 6 皆が使っているのか、一部の人間が使っているのか
- 7 収集人の年齢、職業、性別、出身、読み書き能力の有無
- 8 収集人の名前
- 9 収集人のその単語についての考え
- 10 収集日²⁴

その年の内に協会には10万を越える用紙が集まり、当時の国民教育大臣レシット・ガリプは、「純正トルコ語つくりあげようという国民の気持ちがひしひしと伝わってくるようである」²⁵と述べた。用紙はアンカラ、イスタンブル、から1万以上、その他にもコンヤ、カイセリ、チャナッカレからも多く集まった。²⁶重複を排除すると、約3万5千単

²⁴ *Derleme Sözlüğü I*, 1963, pp. XII-XIII

²⁵ Korkmaz, 1992, pp. 253-255

²⁶ *ibid.*, pp. 253-255

語が収集され、その中には近隣のアゼルバイジャン語、トルクメン語も含まれていた。できあがった辞書は、協会の設立目的のひとつである「トルコ語の豊かさを明らかにする」点を実現していた。

収集作業と時を同じくして、トルコ語の相当語を探すアンケートが新聞に掲載されるようになった。1933年3月10日、言語アンケートの開始を告げる記事がジウムフリエツ紙に掲載され、毎日アルファベット順で平均15個ずつのオスマン語単語のリストが出るのが発表され、読者は相当するトルコ語を提案するよう求められた。²⁷単語リストの発表には、アナトリア通信、イスタンブルやアンカラのラジオ局が協力した。アンケートの回答は紙面でフィードバックされた。

特に、新聞記者は記事を書く時に、見つかった相当語を使う必要性があった。しかし、厳密な規則が存在しなかったため、相当語が複数ある場合は、その中から自由に選ぶことができた。これがのちに紙上で混乱を巻き起こす元凶となるのである。

アンケートがはじまり3ヶ月ほど経つと、既存のアラビア語やペルシア語に相当するトルコ語単語探しが容易でないことが判明しはじめた。そのため、1933年6月9日付けの新聞では賢明な対策として、人々が常用している単語は起源にかかわらずトルコ語とみなすこと、また、提案する相当語は外国語や造語ではなく、純正トルコ語であるべきと発表した。²⁸レバンドによれば、アンケートは収集ほど成果をあげず、開始から3ヶ月半で得られた回答は約1300単語であった。このうち協会が辞書掲載に適していると判断したのは半分の約650単語であった。²⁹

その一方で、協会のメンバーはトルコ語単語を探すために150冊にのぼる地方の民話集、詩選集、国内外の辞書や古い文献を調査していた。集まった単語は分類され、約7000単語を収容した辞書が出版された。しかし、中身はトルコ語、アナトリア諸方言、アゼルバイジャン語、トルクメン語、キプチャク語、チャガタイ語、アルタイ語の寄せ集めで、トルコ語の音韻体系に即さない風変わりな単語も多く存在した。

2-2-2. 造語の実例

全国規模の単語収集とアンケート、古い文献の調査により多くの純正トルコ語が明らかになった。協会は、一方でトルコ語の語構成、派生法、接尾辞を研究していた。³⁰この2つの結果を合わせ、造語が行われるようになった。ここでは、1934年にアタテュルクがスウェーデンからの来賓を迎えた時に行った演説、1935年に共和人民党が発表した

²⁷ *ibid.*pp.504-506

²⁸ Levend,1972,pp.416-417

²⁹ *ibid.*pp.416-417

³⁰ これにかんし、1933年と1934年にアフメット・ジェバットが『トルコ語語構成』(*Türkçede Kelime Teşkilî*)、『接尾辞小辞典 I』(*Ekler Lûgatçesi I*)を出版した。

綱領につけられた辞書³¹、1937年に、アタテュルクが出版した『幾何学』(Geometri)という小冊子³²より、造語の実例をいくつか見ていく。

1934年に、アタテュルクがスウェーデンからの来賓を歓迎する目的で行った演説より。³³

ataç 「祖先」、beğeni 「好み」、bitim 「終結」、etken 「要因」、konuk 「客」、kutlu 「幸運な」、özel 「特別な」、sanlı 「名高い」、uyum 「調和」、ünlü 「有名な」³⁴

1935年の共和人民党の綱領につけられた辞書より。³⁵

artım 「精製」、akım 「流れ」、araç 「道具」、bildirik 「通知」、devrim 「革命」、egemen 「君主」、eğitim 「教育」、endüstri 「産業」、finansal 「財政の」、gelişim 「発展」、girişim 「試み」、ilgi 「興味」、izdeş 「弟子」、kamusal 「公の」、kamutay 「大国民議会」、kapasite 「能力」、karşıt 「反対の」、kazı 「発掘」、kınav 「活動」、konu 「主題」、kurum 「協会」、örgüt 「組織」、seçmen 「有権者」、sosyal 「社会の」、yaraç 「道具」、yasav 「規律」、yetki 「権力」、yönetim 「支配」

アタテュルクが出版した『幾何学』より。³⁶

açı 「角度」、artı 「+ (足す)」、boyut 「面積」、bölü 「÷ (割る)」、çarpı 「× (かける)」、dikey 「垂直」、dikey üçgen 「直角三角形」、düşey 「垂直線」、düzey 「平面」、eksi 「- (引く)」、eşkenar üçgen 「正三角形」、ikizkenar üçgen 「二等辺三角形」、türev 「導関数」、üçgen 「三角形」、yanal 「側面の」、yatay 「水平の」、yöndeş 「同位の」、yüzey 「面」

以上の単語は、そのほとんどが動詞語幹や名詞に接尾辞をつけて造語されている。ここでは、接尾辞の種類ごとに造語を分類し、説明を加える。説明では、接尾辞の本来の特徴と単語の例を示す。また、造語でどのように使われたかにも触れる。

1 - ç

araç 「道具」 ← ara - 「探す」 + - ç

³¹ 綱領には、読者の利便性を考え小さなトルコ語 - オスマン語辞書がつけられていた。

³² 幾何学を教える者、それについて執筆する者の手引書として国民教育省より出されたが、当時は著者の名前を伏せていた。

³³ レバンドとオズギュは、それぞれ演説の中で使われた造語を挙げている。本稿では、両者の挙げた造語のうち共通している単語を例として示す。Levend,1972,pp.424-426,Özgül,1972,pp.35-37

³⁴ 『新レッドハウストルコ語 - 英語辞書』(Redhouse Yeni Türkçe-İngilizce Sözlük,1968)では、造語に neol.と表記をつけているが、上記のうち bitim 「終結」、konuk 「客」、kutlu 「幸運な」、sanlı 「名高い」、uyum 「調和」、ünlü 「有名な」にはその表記がない。

³⁵ Parla,1992,pp.100-105

³⁶ Korkmaz,1992,pp.414-418

ataç 「祖先」 ← ata 「父」 + - ç
yaraç 「道具」 ← yara - 「役立つ」 + - ç

本来、この接尾辞は再帰動詞の語幹や、n で終わる動詞語幹について形容詞や抽象名詞をつくる。例) inanç 「信条」 ← inan - 「信じる」 + - ç³⁷しかし、上記の造語では、これが再帰動詞ではない語幹や名詞についている。このように、接尾辞本来の性質を無視してつくられた単語は、のちにでっちあげ (uydurma) 単語と呼ばれ、批判の対象となった。3 つめの yaraç は定着しなかった。

2 - daş

yöndeş 「同位の」 ← yön 「方向」 + - deş
izdeş 「弟子」 ← iz 「跡」 + - deş

この接尾辞は母音調和の影響を受けないが、無声子音のあとは - taş となる。名詞について、その名詞の観念へのつながりを示す。例) dindaş 「同宗信徒」 ← din 「宗教」 + - daş³⁸上記の造語では、この接尾辞が母音調和により - deş となって現れている。

3 -(s)el

finansal 「財政の」 ← finans 「財政」 + - al
kamusal 「公の」 ← kamu 「公衆」 + - sal
özel 「特別な」 ← öz 「自身、本質」 + - el
yanal 「側面の」 ← yan 「側」 + - al

アラビア語のニスバ形容詞を置きかえるため、-(s)el は多用された。一時は、トルコ語の接尾辞だと誤って解釈されたが、実際はフランス語の模倣である可能性が高い。³⁹

4 - ey

dikey 「垂直」 ← dik 「まっすぐな」⁴⁰ + - ey
düşey 「垂直線」 ← düş - 「落ちる」 + - ey
düzey 「平面」 ← düz 「平らな」 + - ey
yüzey 「面」 ← yüz 「表面」 + - ey

この接尾辞は既に使われなくなっていたものである。以前は名詞につき、その名詞の領域内にあるという意味を表していた。例) kolay 「簡単な」 ← kol 「腕、能力」 + - ay, güney 「南」 ← gün 「太陽」 + - ey⁴¹造語では、名詞の他にも動詞語幹や形容詞につけられた。

³⁷ Lewis,2000,p.221

³⁸ *ibid.* p.60

³⁹ -(s)el の使用をめぐる議論にかんして、Lewis,1999,pp.101-105 参照。

⁴⁰ この dik は、動詞の「直立する、縫う」とも考えられる。

⁴¹ *ibid.* pp.96-97

5 -gen

etken「要因」← et - 「する」 + - ken

üçgen「三角形」← üç「3つ」 + - gen

動詞語幹につき、本来は強意の形容詞をつくる。例) çekingen「内気な」← çekin - 「引込む」 + - gen⁴²造語では数詞につけて、さらに dörtgen「四角形」、beşgen「五角形」等つくられた。

6 -gi

ilgi「興味」← il - 「結びつける」 + - gi

yetki「権力」← yet - 「十分になる」 + - ki

古い接尾辞で動詞語幹につき、行動またはその結果を示す。例) duygu「感情」← duy - 「感じる」 + - gu⁴³

7 -i

açı「角度」← aç - 「開く」 + - ı

artı「+ (足す)」← art - 「増える」 + - ı

beğeni「好み」← beğen - 「気に入る」 + - i

bölü「÷ (割る)」← böl - 「分ける」 + - ü

çarpı「× (かける)」← çarp - 「かける」 + - ı

kazı「発掘」← kaz - 「掘る」 + - ı

konu「主題」← kon - 「置かれる」 + - u

単音節、子音で終わる動詞語幹につき、行動やその結果を示す。例) ölü「死んでいる」← öl - 「死ぬ」 + - ü⁴⁴この接尾辞は造語に多用された。

8 -in

yayın「刊行」← yay - 「広げる」 + - ın

名詞をつくる接尾辞である。例) ekin「作物」← ek - 「種をまく」 + - in⁴⁵

9 -ik

bildirik「通知」← bildir - 「知らせる」 + - ik

konuk「客」← kon - 「泊まる、止まる」 + - uk

受身の意味の形容詞をつくるか、多くの場合、行動の結果を示す。例) öksürük「咳」←

⁴² Lewis,2000,p.222

⁴³ *ibid.* p.221

⁴⁴ *ibid.* p.220

⁴⁵ *ibid.* pp.224-225

ökşür - 「咳をする」 + - ük⁴⁶Bildirik は定着しなかった。

1 0 - im,-m

akım 「流れ」 ← ak - 「流れる」 + - im
arıtım 「精製」 ← arıt - 「きれいにする」 + - im
bitim 「終結」 ← bit - 「終わる」 + - im
devrim 「革命」⁴⁷← devir - 「ひっくり返す」 + - im
eğitim 「教育」 ← eğit - 「訓練する」⁴⁸+ - im
gelişim 「発展」 ← geliş - 「育つ」 + - im
kurum 「協会」⁴⁹← kur - 「建設する」 + - um
uyum 「調和」 ← uy - 「合う」 + - um
yönetim 「支配」 ← yönet - 「管理する」 + - im

多くの場合、名詞について単独の行動を示す。例) yem 「飼料」 ← ye - 「食べる」 + - m⁵⁰造語で多用された接尾辞のひとつである。

1 1 - it, - t

boyut 「面積」 ← boy 「大きさ」 + - ut
karşıt 「反対の」 ← karşı 「反対」 + - t
örgüt 「組織」 ← örgü 「編物」 + - t

もともと、非生産的な古い名詞接尾辞である。例) yoğurt 「ヨーグルト」 ← yoğur - 「こねる」 + - t⁵¹

1 2 - li

kutlu 「幸運な」 ← kut 「幸運」 + - lu
sanlı 「名高い」 ← san 「名声」 + - lı
ünlü 「有名な」 ← ün 「名声」 + - lü

名詞の単数形について、名詞や形容詞をつくる。例) akıllı 「賢い」 ← akıl 「知恵」 + - lı⁵²

⁴⁶ *ibid.* p.220

⁴⁷ 『新レッドハウストルコ語 - 英語辞書』によれば devrim 自体は以前からあり、「曲げる
こと」の意味であった。新語義として「革命」の意味になった。

⁴⁸ 『新レッドハウストルコ語 - 英語辞書』によれば eğit - 「訓練する」という動詞自体が
造語である。

⁴⁹ 『新レッドハウストルコ語 - 英語辞書』によれば kurum はもともと「構成」の意味だっ
た。新語義として「協会」の意味になった。

⁵⁰ Lewis,2000,p.224

⁵¹ *ibid.* p.223

⁵² *ibid.* p.57

1 3 - men

egemen 「君主」 ← ege 「保護者」 + - men
seçmen 「有権者」 ← seç - 「選ぶ」 + - men

古いトルコ語で、形容詞について強意の名詞をつくった。例) *şişman* 「太った」 ← *şiş* 「膨れ上がった」 + - *man*⁵³造語においては、職業を表す名詞に多用された。しかし、バングオールは、ドイツ語で人を表す -*mann* の用法を模倣していたと指摘している。⁵⁴

1 4 - tay

kamutay 「大国民議会」 ← kamu 「公衆」 + - tay

ルイスによれば、モンゴル語の *quriltai* 「貴族の会議」の一部を引用した形である。⁵⁵これを使って多くの行政組織の名称がつくられた。例) *danıştay* 「国家評議会」 ← *danış* - 「相談する」 + - *tay*、*yargıtay* 「最高裁判所」 ← *yargı* 「決定」 + - *tay*

1 5 - v

kınav 「活動」 ← kına - 「非難する」 + - v
yasa 「規律」 ← yasa - 「制定する」 + - v

中央アジアのチュルク語からの接尾辞である。⁵⁶どちらも定着しなかった。定着した単語の例) *sınav* 「テスト」 ← *sına* - 「試す」 + - *v*、*görev* 「義務」 ← *gör* - 「見る」 + - *ev*

1 6 その他

endüstri 「産業」
kapasite 「能力」
sosyal 「社会の」

どれもフランス語の借用で、トルコ語とは言い難い。外国語でも、アラビア語やペルシア語起源の単語でなければ、そのまま借用されていたことがわかる。

eksi 「－ (引く)」

eksik 「不足した」に類似させたでっち上げである。⁵⁷

eşkenar üçgen 「正三角形」 ← *eş* 「等しい」 + *kenar* 「辺」 + *üçgen* 「三角形」

⁵³ *ibid.* pp.219-220

⁵⁴ Banguoğlu,1987,p.363 より。

⁵⁵ Lewis,2000,p.225

⁵⁶ *ibid.* pp.225-226

⁵⁷ Lewis,1999,p.66

ikizkenar üçgen 「二等辺三角形」 ← ikiz 「双子」 + kenar 「辺」 + üçgen 「三角形」
dikey üçgen 「直角三角形」 ← dikey 「垂直の」 + üçgen 「三角形」

上記は複合語である。「正三角形」、「二等辺三角形」では、ペルシア語起源の kenar 「辺」を複合名詞にして意味を派生させている。

2-2-3. 造語における手法と結果

上述の実例が示すように、トルコ語の接尾辞や外国語の要素を利用して造語が行われていた。だが、造語の中には接尾辞本来の性質 - 生産的／非生産的なのか、名詞／動詞語幹につくのか - が無視されているケースがある。これは、ひとまずアラビア語やペルシア語起源の単語を造語で置き換えられれば良いとする、形ばかりを重視した形式主義が優先された結果と言えらるだろう。

また、造語のもとになる名詞や動詞の意味と、その結果できた造語の意味を比べると、既存のトルコ語の意味範疇が拡大／縮小されている場合もある。この例は、前述の - im, - m を使った造語において顕著に見られる。この他にも、トルコ語の文法上、存在しない形や、文法上は存在しても語いとして定着していない形に意味を加え、そこからさらに派生させる手法もとられたが、⁵⁸これは本稿で扱う時代より後と考えられる。

以上のことから、時には動詞の意味範疇を拡大／縮小させながら、トルコ語の接辞やチュルク諸語の一部を活用して造語が行われてきたことがわかる。しかし、形式主義であったり知識不足により、誤った造語も少なくはなかった。

でっちあげの単語も含め、過去に前例のない困難な任務を課せられたトルコ言語協会が取り組んだ結果は、今日のトルコ語に強い影響を与えている。そんな中、最終的に意味にずれが生じたり、定着しなかった単語が多くあるのも事実である。

一方で、トルコ語は接尾辞が豊富なため、ひとつの造語が定着すると、それをもとにくつも派生させることができた。il- 「結びつける」と - gi からできた ilgi 「興味」にかんして言えば、ilgilen - 「興味を持つ」、ilgilendir - 「興味を持たせる」、ilgili 「関係した」、ilgililik 「関係のあること」、ilginç 「興味深い」、ilginçlik 「興味深いこと」、ilgisiz 「無関心な」、ilgisizlik 「無関心なこと」があげられる。

⁵⁸ Röhrborn, 2001, pp.3-4 例) トルコ語で使役の意味を表す接尾辞、- t, - tir がある。前者は母音、または l か r で終わる多音節動詞語幹につく。後者はそれ以外の動詞語幹につく。iç - 「飲む」の使役形は、イレギュラーな形の içir - 「飲ませる」で içit - は文法上存在しない。しかし、これに「注射する」という意味が加えられ、さらに医療用語で içitim 「注射」がつけられた。また、相互の意味を表す接尾辞 - ş がある。İlet - 「伝える」の相互形 iletiş - は語いとして定着していなかったが、この形を派生させて iletişim 「コミュニケーション」がつけられた。

ここで、言語改革における単語の扱い方と、それまでの簡易化主義者、特にズィヤ・ギョカルプの考えを比べると、2つの点で大きく異なっていることが明らかになる。ひとつめに、トルコ言語協会はトルコ語で既に使われなくなった単語や接尾辞を蘇らせて使っていた。2つめに、チュルク諸語やフランス語をはじめとする外国語から接尾辞等を借用していた。言語改革では、古い接尾辞や外国語の要素も全てひっくるめて取り入れた結果、ある部分では体系的な、またある部分では外国要素が入り混じった語いが生まれたと言えるのではないだろうか。

2-3. 問題と軌道修正

造語や相当語探しが順調に行われても、人々の間に定着しなくては意味がない。ここでは、言語改革がぶつかった問題と、軌道修正として出された太陽言語論を見ていく。また、これと関連してウォール・ストリート・ジャーナル誌の記事も紹介する。

2-3-1. 混乱と行き詰まり

言語改革が始まり、いち早く国民に差し出されたのは、オスマン語に相当するトルコ語が掲載された「調査誌」である。1933年から、段階的に出版されるようになった「調査誌」に飛びついたのは新聞記者たちであった。彼らはまず、オスマン語で記事を書き、助手が「調査誌」から手当たり次第に相当語を探し、単語を置き換えていった。

ところが、問題は「調査誌」のつくりにあった。オスマン語1単語に対し、トルコ語や他のチュルク諸語から集められた相当語がいくつも提示されていたのである。例えば、アラビア語起源の *akıl* 「知恵」には、*an,arga,ay,ayla,bilik*…と28にも及ぶ候補があり、そのどれをとってもなじみのない、まるで外国語であった。*Hasis* 「けちな」に至っては、66の候補があった。⁵⁹新聞の読者が混乱したのは言うまでもない。矢継ぎ早に相当語探しが行われる中、純化自体がその方向性を失いかけていたのである。

「調査誌」が引き起こした混乱は深刻なものであった。ファーリフ・ルクフ・アタイの回想によると、当時アタテュルクは彼に次のように話している。

「われわれは、言葉を行き止まりに持って行ってしまった。このまま放っておけるだろうか？そんなことはできない。他の者にこれを救いだす仕事を任せるわけにはいかない。行き止まりから言葉を救おうではないか」⁶⁰

1934年に開催された第2回トルコ言語会議では、「調査誌」による混乱を鎮めることが急務とされた。翌年、かねてより行われてきた紙上アンケートの結果をまとめ、「オスマ

⁵⁹ *Dil devriminin 30 yılı*,1962,pp.24-25

⁶⁰ Korkmaz,1992,p.222

ン語 - トルコ語ポケットガイド」が出版された。「調査誌」とは違い、ひとつの単語にひとつの相当語のみが示してあったため、⁶¹当時の混乱を鎮め、言語改革を秩序立てる役割を果たしたと推測される。

このようにして、1935年までに完全な純化が難しいことが自ずと明らかになっていった。いくら masa「机」を dört ayak「四本足」⁶²、asansör「エレベーター」を iner çıkar「上り下り」と工夫して呼んでも、人々に親しまれている単語には一向に効力を持たなかった。ズィヤ・ギョカルプは、この点をあらかじめ見抜いていたのである。アタテュルクは外国語を必要としない完璧なトルコ語を欲していたが、これはあくまで理想に過ぎない。残された語いはまだ山のようにあり、とても手が回らない状況に、アタテュルクは純化の夢を捨て、新たなアプローチを試みることになる。

2-3-2. 太陽言語論

行き詰まりかけていた言語改革の救世主となり、問題を一時的に解決したのは、1935年に発表された太陽言語論 (Güneş - Dil Teorisi) であった。この論では、あらゆる言語の源がトルコ語であると主張されていた。

太陽言語論出現の背景には、2つの要因があると考えられる。ひとつは、1930年に発表された歴史論である。その内容は、世界の文明史上におけるトルコ人の貢献を謳い上げ、最初の文明発祥の地をトルコとする、極端な自民族中心主義にもとづくものであった。⁶³もうひとつは、ウィーン大学の言語学博士クヴェルギッチが1935年にトルコ言語協会に送った、『トルコ語における諸要素の心理』という論文である。この中で、mの音は1人称、nは2人称、zはより広い範囲と関連があるという主張のもと、⁶⁴人類初の言葉はトルコ語であると結論づけられていた。

アタテュルクは、互いの論を補足し合うこの2つに言語改革における軌道修正の糸口を見出したのである。クヴェルギッチの論文を受け、アタテュルクはトルコ言語協会のメンバーと太陽言語論をつくりあげた。

以下は、太陽言語論の要約である。

「人間が、本能のままに行動する低俗な動物から考える生き物になってから最初に思いついた考え、関心の一番の対象は、日々の生活や行動に影響力を持つ太陽であった。太陽は、その熱で人々が必要とする様々な物を得る手助けをした。太陽は全てであり、全ては

⁶¹ *Dil devriminin 30 yılı*, 1962, pp.25-26

⁶² 現在、dört ayak は「四足獣、手足」の意味。

⁶³ 永田、2004年、124頁

⁶⁴ トルコ語の所属人称接尾辞では、el-im が「私の手」、el-in が「君の手」、el-imiz が「私たちの手」、el-iniz が「あなたたちの手」である。

太陽であった。人々は、太陽を見て、トルコ語の基本的な音節である *ağ* と発した。太陽ははじめ、*ağ* と呼ばれた。時とともに、太陽と関連する概念が、ちょうど細胞分裂するように生まれていった。発声器官の発達に伴い、太陽、光、熱、火、高さ、時間、大地…という具合に生まれた概念に子音がリンクして単語が形成された。この一連のプロセスは、文明発祥の地である中央アジア、つまりトルコで起こった。そして、人々の移動によってこの言葉が広まり、多くの語族が育っていった」⁶⁵

当時の言語改革の状況を打破するには、あらゆる言語の起源をトルコ語とする奇抜な論が必要だったのである。太陽言語論を発表したアタテュルクの真意は謎に包まれているが、これ以上の純化に歯止めをかけ、残りの借用語を維持するためであった可能性が高い。いずれにせよ、これが言語改革において方向転換の役割を果たしたことに間違いはないと言える。

皮肉なことに、太陽言語論出現による方向転換は、さらなる造語の機会を生み出すことになる。外国語の要素も、もとをたどればトルコ語に行きつくのだから、利用しても問題ない、という発想のもと、造語が行われたのである。バングオールは、のちにこれを「純化ではなく外国語化」と振り返っている。⁶⁶

バングオールの指摘によれば、フランス語の *école* を模倣したトルコ語の *okul* 「学校」は、*oku* - 「読む」から派生したと解釈が加えられた。他にも、ラテン語の *generalis* とトルコ語の *geniş* 「広い」の *gen* の類似を指摘した上で、トルコ語の *genel* 「一般的な」を正当化しようとするなど、多くの誤った解釈がされた。⁶⁷ 前述した造語の実例で、フランス語の *-(s)el* やドイツ語の *-men* といった外国語の要素を利用していたことから、こういった解釈を見てとることができる。

ルイスによれば、1936年に開かれた第3回トルコ言語会議の場で太陽言語論が発表されるも、外国の専門家の反応は薄かったという。⁶⁸ トルコ言語協会は自らの非学術性を露呈してしまったと言えるだろう。アタテュルクの言語に対する興味も、この頃から次第に失われ始めていった。⁶⁹ 1938年にアタテュルクが死去すると、トルコ言語協会は、華々しい時代を終えたのである。しかし太陽言語論を武器に、誤って借用や模倣された多くの単語が、その後語いとして定着していったのも事実である。

最後に、当時を振り返ったウォール・ストリート・ジャーナル誌の記事、「アタテュルク以来トルコの話し言葉は複雑化 - 純化運動がもたらした奇妙な結果」の全訳を紹介する。

⁶⁵ *Dil devriminin 30 yılı*, 1962, pp.31-32

⁶⁶ Banguoğlu, 1987, p.369

⁶⁷ *ibid.* pp.359-369

⁶⁸ Lewis, 1999, p.62

⁶⁹ *ibid.* ルイスは、アタテュルクが1936年と1937年に、この中で次第にアラビア語起源の単語の使用が増えていることを指摘している。 p.68

(記事の執筆者はブレント・バウアーとメティン・デミルサル。翻訳は著者による。)

はじまりは、トルコ人が発した「ああ」という単語だった。

これは中央アジアのステップに住む部族民が、太陽の威厳に対して発した単語だった。あらゆる人間の言語はこのたった一言からはじまった。

近代トルコの創設者であるケマル・アタテュルクは、あらゆる時代を通して最もいかがわしく、けれども政治的に抜け目のない言語学論を主張した。

アタテュルクは、1936年ある問題を抱えていた。6年前、彼は国民に対しトルコ語から外来語を取り除き、代わりにトルコ語を派生させた単語を置き換えようと訴えていた。国の素人学者がこれに飛びついた。結果は集団的な混乱であった。

これに終止符を打つため、トルコを西洋化した男は単語を全てトルコ語にすることにした。いわゆる太陽言語論をでっちあげると、外来語はあつという間にトルコ語になった。

混乱はおさまった。そして素人語源学者はナイアガラやアマゾンといった非トルコ語的な単語のトルコ性を主張することに注目しだした。アタテュルクはその一方で、外交上の問題に専念しだした。

今日まで、単語をもてあそびたいという欲望はトルコに根強く残っている。そしてその欲望が1932年にアタテュルクの設立した言語アカデミーに勝るところはない。

もじゃもじゃまゆ毛のトルコ言語協会会長で、1949年以来会員のハサン・エレン氏は、「わたしたちは太陽言語論をまともに扱っていない」と言う。「アタテュルクは改革のペースを緩めたかった。父親や母親の、自分たちの子供の言うことがわからないという不平を受けていた」

エレン氏や協会の同僚はまた、アンカラ本部のロビーに刻まれている燃え盛る忠誠を文字通りに受け取っていない。「国と崇高な独立を守ることを心得ているトルコ国民は、言語を外国語の束縛から解放しなくてはならない」(Ülkesini,yüksek istiklâlini korumasını bilen Türk milleti,dilini de yabancı diller boyunduruğundan kurtarmalıdır.)⁷⁰

仕事部屋にアタテュルクの肖像画を飾っているおしゃれな着こなしのエレン氏は、「束縛」は言いすぎだと言う。彼は現在の言語哲学をこう説く。「トルコ語に話し言葉として浸透していたり、木琴(ksilofon)のようにトルコ語に相当するものがない単語を排除する理由はない。木琴のことを、ksilofon 以外に何と呼べばいいのか」

「わたしたちがやろうとしていることは、改革のためトルコ語をできる限り純粋な状態に保つことだが、一定の限度に限る」

協会の会員であり、イスタンブール大学の古トルコ語教授であるオスマン・フィクリ・セルトゥカヤ氏は、初期の協会はややきちがいじみていたと話す。1932年、政府は全国の公務員に辞書にはないトルコ語の話し言葉の単語リストを編集するよう求めた。数ヶ月の間に12万5千のリストが集まった。言語協会のメンバーはアラビア語やペルシア語起源の単語に相当するトルコ語を見つけるため、それらに目を通し、同時に古いトルコ語の文献も調べた。

⁷⁰ この一節は、1930年に出版されたサドリ・マクシャーディーの『トルコ語のために』(Türk Dili İçin)に感銘を受けたアタテュルクがメモに走り書きしたものである。トルコ

協会は「ペン」の意味であるアラビア語起源の単語 *kalem* に対し、9つの置き換え単語を見つけた。*Kamis,kavri,sizgic,yaguş,yazgac,yavus*⁷¹…を見つけ、「このことでひどい混乱が起きた」とセルトゥカヤ氏は言う。

結果、アタテュルクは学者集団に、選択肢を狭めて1単語に1候補にするよう命令した。彼は純正トルコ語による演説を止め、最終的に太陽言語論を思いつく。「残る全ての単語をトルコ語と説明するため」と教授は話す。例えば、彼はナイアガラはトルコ語の *ne yaygara* 「何とうるさい」に由来すると主張した。また、アマゾン河は *ama uzun* 「何と長い」から来たのだと言った。さらに、アリストテレスは、その名前をトルコ語の *ali usta* 「よろず屋」から取ったとしたのだ。

このことで、外国語風に聞こえる単語がトルコ起源であると証明しようと試みが行われた。1936年1月31日のジュムフリエツ紙に「*Elektrik* はトルコ語だ！」と大見出しが踊った。

1938年にアタテュルクが亡くなると、後継者であるイスメット・イノニュー大統領は政策をトルコ起源の単語探しに戻した。だがその頃、協会の膨れ上がる会員には彼の命令を実行する精力が不足していた。1940年、協会会長は、「借用語で話し言葉に浸透している単語は、一定の条件のもと帰化したトルコ語とみなす」、と発表した。

だが、言葉に手出しをしようという欲求は残った。その後40年間、様々な政党の自称専門化が何千もの単語をでっちあげた。そのうちいくつかは一般的に使われるようになり、いくつかは忘れ去られた。

セルトゥカヤ氏は、マルクス主義者がトルコの文化的アイデンティティを傷つける目的で単語を加工したりでっちあげたりするようになった、と主張する。アラビア語で「神」を意味する *allah* に対し、彼らはトルコ語起源で「神」も「崇拝されるもの」も意味する *tanrı* を提案したのである。

協会メンバーのひとりでアンカラのガーズィー大学のトルコ語方言学教授アフメット・ビジャン・エルジラスンは、イデオロギーにもとづかないで考案された専門用語にも不平をもち、「条件を意味するアラビア語起源の *şart* に対し、*koşul* が提案された。だが、人々は *şart* を1000年もの間使ってきた。まるで、*condition* が英語に属さない、と言われることと同じだ」

一般的に受け入れられなかったでっちあげの単語の例には「バレーボール」に *uçantop* 「飛ぶボール」、アルファベットに *abece*、グレープフルーツに *altintop* 「金のボール」、外科医に *yarman* 「切る人」等がある。

1982年に協会の運営が政府に引き継がれて以来、協会はもっと事務的になった。会員は40名の専門家に減らされ、トルコ語文法、方言、文献、用語、出版、辞書制作の部門に分けられた。彼らは団結して新しいトルコ語起源の単語を承認、否認している。

だが雰囲気は一樣に穏やかである。協会トップのエレン氏は、感情的になりやすい若い同僚に向かって「全てから騒ぎさ」と言って微笑む。

語原文は、Levend,1972,p.408より引用。

⁷¹ これらの単語は英語のアルファベットで表記されているが、実際のトルコ語のアルファベットでは *c* が *ç*、*g* が *ğ*、*i* が *ı*、*s* が *ş* になる可能性がある。筆者は、これらの単語を検討する機会を得なかったため、ここでは記事通りの表記に従う。

エレン氏はこう続ける。「多くの国（イタリア、フランス、イスラエルを含む）が自国の言葉を守るためにアカデミーを設立し、たまに道を外すことがある。オーストリアのナショナリストがアタテュルクとは違うが、かつて「月言語論」を展開した。それもまた、どうにもならなかった」⁷²

この記事のように、後から太陽言語論の愚かさを指摘するのは簡単である。しかし、言語改革は当時、それほどまでに混乱を極めていたのである。アタテュルクは生前、太陽言語論を出すことで一応の責任を取ろうとしたと考えられる。

⁷² *Wall Street Journal*, March 15 1985

(https://secure.pqarchiver.com/wsj/access/27186488.html?dids=27186488:27186488&FMT=FT&FMTS=ABS:FT&date=Mar+15%2C+1985&author=By+Brent+Bowers+and+Metin+Demirsar&pub=Wall+Street+Journal&edition=Eastern+edition&startpage=1&type=8_1984&desc=Ever+Since+Ataturk%2C+T)

第三章 その後の意見、影響

言語改革では誤った造語の手法や、太陽言語論という究極の解決策が取られたものの、結果的にトルコ語の語いに変化が現れた。本章では、この変化がどのような批判を生んだか、また言葉に影響を与えたかに触れる。

3-1. 言語改革に向けられた批判

1940年代になり、言語改革の成果が現れだすと、様々な立場の人々がそれぞれ批判を行うようになった。中でも、言葉の世代差は大きな問題であった。これは言いかえれば、言語改革が語いに与えた影響が大きかったということである。

3-1-1. 世代差 - 新たな2重言語 -

アタテュルクの死は、言語改革の一連の取り組みに反対する者にとって、最初の好機となった。トルコ言語協会は、「太陽言語論は、言語改革の行き詰まりを察したアタテュルクが後退の戦略として打ち出した逃げ道であった」、「アタテュルクが死んだ今、言語改革が終わったも同然である」⁷³という批判にさらされた。

トルコ言語協会の行った純化運動にかんし、政治的立場からも様々な意見が存在した。共産主義者は、人々、文学、役人の言葉の差を広げる資本主義運動とみなし、極右派の人々は、トルコのトルコ人と当時のソビエト連邦のトルコ人との相互理解を妨げる目的だと主張した。⁷⁴新聞では、言葉の世代差を広げようとする共産党員の陰謀という解釈がされていた。

彼らに共通した認識は、過剰な純化によりトルコ語が大きく変化した、ということである。確かに、トルコ語の変化は親と子どもの中に世代差を生み出した。雑誌編集者のヒダージェット・ヤヴズ・ヌフオールは、ラジオの対談で次のように話している。

「トルコ言語協会は、教育において素晴らしい役割を果たした。用語をトルコ語化して簡素にし、教育を迅速化した。一方で、言語改革は知識人、作家のトルコ語を簡素化する程度で良かったのに、人々の言葉にも手出しをした結果、世代差を生んでしまった」⁷⁵

それまで言語改革を支持してきたにもかかわらず、アタテュルクの死後、批判に転じる政治家もいた。共和人民党議員のファト・キョプリュは、1932年の第1回トルコ言語会議の席で言語改革を賞賛していた。

⁷³ *Dil devriminin 30 yılı*, 1962, pp.34-35

⁷⁴ Lewis, 1999, pp.70-71

⁷⁵ Çongur, 1963, pp.13-14

「長年、多くの外国語の影響を受けてあるべき自然な姿を失ってしまったトルコ語を、再び昔のように豊かにして独立を勝ち得るため、今日最も進歩的な文明の言葉にするため、ここに最初のトルコ言語会議を開催する…近頃、国民意識が芽生えたことで言葉が発展し、死語とみなされていたものが復活するようになった。アタテュルクは、トルコ精神を誰よりも早くから深く理解し、いつも国民を正しい方向に導いていきた。彼が国民に捧げた革命のひとつである言語改革は、安定した知識のもとに実行されるため、他の改革のように成功をおさめることだろう」⁷⁶

ところが、アタテュルクの死後、1940年代に入り徐々に明らかになってきた言葉の世代差を指摘している。

「学童は親の話す言葉を理解するのに苦労するようになった。トルコ語自らの持つ発展、簡素化のスピードは言語改革に奪われ、でっちあげの言葉が世代差を生み出した。こうして、オスマン帝国の時と同じように、知識人と人々の言葉に似た2重言語の状態に再び陥ってしまったのである。文明化した社会の言葉は、その成員である国民とともに成熟し、世代間の橋渡しをする。歴史、文化、芸術の点から世代間のつながりが構築されるのである。だが、わたしたちがつくりあげようとした言葉は、このつながりを壊し、2重言語という結果を招いた」⁷⁷

どのようなやり方で言語改革が行われようとも、世代差は結果としてついてくるものである。トルコ言語協会メンバーのオメル・アースム・アクソイの反論は楽観的だ。

「親の世代が苦労しないように、と子どもたちが犠牲になるべきでない。これから育てて社会に出る子どもたちから親が新しい言葉を学べば良いのである」⁷⁸

クドゥレットもまた、「文明が発達すれば、父子間の言葉だけでなく価値観や考え方も変わり、理解しあうのが難しくなるのは当然のことである。子どものいうことがわからないと不平をもらす父親自身は、その父親と同じ言葉を使っているだろうか。文明が発達した社会では、子どもが父親にではなく、父親が子どもに合わせる必要がある」と主張している。⁷⁹

3-1-2. イスタンブル教師組合

イスタンブル教師組合 (İstanbul Muallimler Birliği) は、言語改革に対し、組織的、且つ厳しい批判を行った。当時、既に「教師」の造語である *öğretmen* が存在したにもかかわらず、これはドイツ語の *-menn* を利用したでっちあげのため、彼らはアラビア語起源の

⁷⁶ *Dil devriminin 30 yılı*, 1962, pp.49-50

⁷⁷ *ibid.* p.50

⁷⁸ Çongur, 1963, p.16

⁷⁹ Kudret, 1964, pp.56-58 より。

muallim を組合の名前に使っていた。彼らもまた純化運動が過剰であったという認識のもと、言語改革に携わった者を批判し、言語改革を過小評価、否定していた。

1948年にイスタンブール教師組合は言語会議を開催した。彼らの主張は以下の4つである。

- ・言語改革は学問と関係のない政治問題になっている。
- ・政府の介入で教科書にはでっちあげの単語だけだ。
- ・そのため、大人は子どもの言うことが理解できなくなっている。
- ・トルコ言語協会は専門家集団ではない。⁸⁰

上記の主張をもとに、言語改革の中止、トルコ言語協会の閉鎖、トルコ語を第1回トルコ言語会議前の状態に戻すことが求められた。これらの批判意見は、言語改革の普及には、常に世代差の問題がついてまわったことを示している。だが、これは時とともに解決される問題であった。

3-2. 言語への影響

最後に、1930年代の言語改革が与えた影響を、語いと言語全体の点から見ていく。トルコ言語協会メンバーや言語愛好家により考案された造語の中には、接尾辞本来の性質を無視していたり、外国語の要素をもとにつくったものがいくつもあった。オスマン文学、近代文学の第一人者であるファーヒル・イズによれば、造語のうち、トルコ語の語構成に即してつくられている単語は40%、でっちあげの単語は37%、意味、形態論的な誤りがあるものの定着した単語は23%である。⁸¹

造語の正統性は別として、使用の割合は右肩上がりに増加していった。イメルが、ウルス、アクシャム、ジュムフリエット、ヒュリエット、ミリエットの5紙の記事から算出した結果によると、トルコ語起源の単語の使用は1931年に35%で、1941年には48%になっている。一方でアラビア語起源の単語の使用は51%から40%に落ちている。⁸²アクソイも、この間にアラビア語やペルシア語起源の単語の使用が減り、西欧の言葉が流入するようになったものの、全体としてトルコ語の割合が高まっていると指摘している。⁸³

イメルの示した数字の変化は決して小さなものではない。テレビがなかったこの時代に、出版物、教育、ラジオ、新聞を通じて広まった改革は、それまでのアラビア語やペルシア語起源の単語が優勢な語いの秩序に変化をもたらしたのである。

⁸⁰ *Dil devriminin 30 yılı*,1962,pp.42-43

⁸¹ Lewis,1999,pp.141-142

⁸² İmer,1998,p.610

⁸³ Çongur,1963,p.22

一方、言語全体に与えた影響では、マイナスの点が目立つ。単語の持つ微妙なニュアンスに配慮がされず、闇に葬られた同義語や、単語のもつ意味自体が廃れている、と相当語が置き換えられずに意味ごと失われてしまった単語もある。例) selika「上手く話したり書いたりする能力」⁸⁴質より量が優先され、意味が慎重に扱われなかった結果、トルコ言語協会が目標としていた言語の豊かさがある意味で奪われてしまったと言わざるを得ない。

トルコ言語協会の改革の対象は、1940年代以降、専門用語に移っていった。1945年に開催された第5回トルコ言語会議の争点は、もはやトルコ語の古さや他言語との関係性ではなく、高等教育で使われる専門用語のトルコ語化であった。また同年、1924年発布の憲法の言葉がトルコ語化された。「憲法」という単語自体も、アラビア語やペルシア語の要素が入り混じった Teşkilat-i Esasiye Kanunu「基本組織法」からトルコ語を使った Anayasa「母なる法」に変わった。

⁸⁴ Lewis,1999,p.149

終わりに

本稿では、1章で20世紀初期の言語簡素化運動の様子、2章でトルコ言語協会の純化運動の中身、3章でその影響を見てきた。その中で、単語の扱われ方が簡素化から純化に切り替わった。そして言語改革は、アラビア語やペルシア語の語いのある程度までトルコ語に置き換えることに成功した。

しかし、そのやり方は多少乱暴であったと言わざるを得ない。専門家集団ではないトルコ言語協会の知識不足もあるが、一番の理由は言語改革が国のイデオロギーにもとづいて行われたためである。それゆえ、接尾辞や単語の意味自体が慎重に扱われることがなかった。言葉を生きたものとみなさずに、手当たり次第の置き換え、造語が行われた。

それでも1930年代の言語改革は語いに変化をもたらした。最終的に、言葉にはあらゆる物を取りこみながら進化していく力があると言えるのではないだろうか。考えてみると、言葉の運命は、その時代の社会の成員が自分たちの言葉をどう見るかにかかっている。トルコの言語改革にしても、3言語を取りこんで発達したオスマン語には、それなりの威厳があったはずである。トルコ共和国の誕生で不自然な存在になった結果、一気に純化の対象となった。その影響を受け今日に至るトルコ語の語いは、様々な意見の中でその存在を保っていると言えるだろう。

今後の課題は、1930年代につくられた造語の例を当時の資料から多く集めて詳細に分析し、どの手法がどれだけの割合でとられたかを調査することである。またこれと関連して、1940年代以降の造語の手法にはどういった変化が見られるかも重要であろう。

参考文献一覧

- Arai, Masami. 1994: *Jön Türk Dönemi Türk Milliyetçiliği*. İstanbul: İletişim
- 新井政美. 2001 年: 『トルコ近現代史』. みすず書房
- Banguoğlu, Tahsin. 1987: *Dil Bahisleri*. İstanbul: Kubbealtı Neşriyatı
- Boeschoten, Hendrik. 1991: “Aspects of language variation”. Hendrik Boeschoten, Ludo Verhoeven (eds.). *Turkish Language Today*. pp. 150-176. Leiden: E. J. Brill
- Brendemoen, Bernt. 1998: “The Turkish Language Reform”. Lars Johanson, Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic Languages*. pp. 242-247. London and New York: Routledge
- Çongur, Rıdvan. H. 1963: *Dilimizin Özleşmesinde Aşırı Davranılmış mıdır?*. Ankara: Ankara Üniversitesi Basımevi
- Derleme Sözlüğü I*. 1963. Ankara: Türk Dil Kurumu
- Dil Devriminin 30 Yılı*. 1962. Ankara: Türk Tarih Kurumu Basımevi
- Gökalp, Ziya. 1999: *Türkçülüğün Esasları*. İstanbul: Toker (初版は 1923 年。Ankara: Matbuat ve İstihbarat Matbaası)
- İmer, Kâmile. 1998: “Language Reform in Turkey and its aftermath”. Lars Johanson, Éva Ágnes Csató, Vanessa Locke, Astrid Menz, Dorothea Winterling (eds.). *The Mainz Meeting (Turcologica 32)*. pp. 607-618. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag
- Karpat, Kemal H. 1984: “A Language in Search of a Nation: Turkish in the Nation-State”. Longo Editore. *The Emergence of Nation Languages*. pp. 175-208. Ravenna
- Korkmaz, Zeynep (ed.). 1992: *Atatürk ve Türk Dili: Belgeler*. Ankara: Türk Dil Kurumu
- Kudret, Cevdet. 1964: “Babalar ve Çocukler”. *Dil Devriminden bu yana düzyazı örnekleri*. pp. 56-59. Ankara: Türk Dil Kurumu
- Lewis, Geoffrey L. 2000: *Turkish Grammar*. New York: Oxford University Press
- Lewis, Geoffrey L. 1999: *The Turkish Language Reform: A Catastrophic Success*. New York: Oxford University Press
- Levend, Ağâh Sırrı. 1972: *Türk Dilinde Gelişme ve Sadeleşme Evreleri*. Ankara: Türk Dil Kurumu
- 永田雄三. 2004 年: 「トルコにおける『公定歴史学』の成立」寺内威太郎・永田雄三・矢島國男・李成市. 『植民地主義と歴史学 - そのまなざしが残したもの』刀水書房
- Özdemir, Emin. 1978: “Yazı Devriminin Getirdikleri”. *Türk Dili* 38/326. pp. 540-547. Ankara: Türk Dil Kurumu
- Özgü, Melahat. 1963: “Atatürk’ün Dilimiz Üzerine Eğilişi”. *Atatürk ve Türk Dili*. pp. 23-40. Ankara: Türk Dil Kurumu
- Parla, Taha. 1992: *Türkiye’de Siyasal Kültürün Resmî Kaynakları 3: Kemalist Tek-Parti İdeolojisi ve CHP’nin Altı Ok’u*. İstanbul: İletişim
- Redhouse, Sir James W. 1968: *Redhouse Yeni Türkçe-İngilizce Sözlük*. İstanbul: Redhouse Yayınevi
- Röhrborn, Klaus. 2001 年: “ ‘Artificial Idiomaticity’ in Neologistic Terms of Republican Turkish”. 『京都大学言語学研究 第 20 号』

Tekin, Talat. 1997: *Türkoloji Eleştirileri*. Ankara: Simurg

Wall Street Journal. March 15, 1985

(https://secure.pqarchiver.com/wsj/access/27186488.html?dids=27186488:27186488&FMT=FT&FMTS=ABS:FT&date=Mar+15%2C+1985&author=By+Brent+Bowers+and+Metin+Demirsar&pub=Wall+Street+Journal&edition=Eastern+edition&startpage=1&type=8_1984&desc=Ever+Since+Ataturk%2C+T)